

早稲田大学環境総合研究センター・ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第9回運営会議
議事メモ

日時：2018年10月19日（金）15:00～17:50
会場：福島県立ふたば未来学園高等学校（A棟食堂）
記録：山田美香＋李洸昊

出席者（敬称略）：

松岡 俊二	早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長 早稲田大学アジア太平洋研究科・教授
小松 和真	福島県広野町復興企画課・課長補佐
磯辺 吉彦	NPO 法人・広野わいわいプロジェクト・事務局長
島村 守彦	いわきおてんと SUN 企業組合・事務局長
菅波 香織	未来会議・事務局長・弁護士
南郷 市兵	福島県立ふたば未来学園高等学校・副校長
永井 祐二	早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授
斉藤 隆秀	デロイトトーマツ
土成 実穂	デロイトトーマツ
松島 武司	（一財）福島イノベーション・コースト構想推進機構

事務局

李 洸昊	ふくしま広野未来創造リサーチセンター事務局
山田 美香	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程

1. 11/2(金)(テーマ3)ワークショップ(WS)について

配布資料「テーマ3WS開催案内（案）」を参照。

- ・今後の第3回ふくしま学（楽）会に向けて、地域で取り組む発電事業を活用した新しい地域社会構築の取り組みを福島復興にも取り入れることも考える必要がある。これからは新しい地域社会、真のスマートタウンを創っていくべきであり、広域連携における地域のサイズ感も含め、今後の方向性を見極めたいと考えている。ただ、議論の方向性を考え、登壇の順番や時間配分なども調整し、WSでの議論から具体的な提案づくりに向け、ポイントを絞るように再検討する。
- ・檜葉町の太陽光発電や日産自動車の関係者の参加も考えたが、檜葉町の発電会社は太陽光パネルの保全に従事している会社であることや浪江町での日産自動車の事業も開始したばかりであることがあり、WSとの関係性を踏まえて今回の参加要請は見送る。
- ・再エネを考えると、「地産地消の電力」と「発電と採算」の2つが主な論点となる。基幹産業がないと人が戻らないということであれば、税金ゼロ・電気代ゼロというようなことくらいを言わない限り、人が戻らないのではないかと思う。固定価格買取（Feed-in Tariff: FIT）制度があることから、お金を媒体とした発電事業と考えなければならない。ただ、FITが終わるときには考えなければならない。浜通り地域における再エネの議論は、FITの制度を変えない限り、既に走り出している再エネ事業を対象とするのは難しい。先行組はこのまま売電していき、その収益をどのように使うかという点と、後発組はこれから始める事業をこの枠組みの中ではなく、他の地域サービスや他地域との連携も視野に入れた地域経営方法の点を議論すべきである。

2. 11/16(金)(テーマ2)ワークショップおよび第10回運営会議について

(1)テーマ2WSについて

- ・開催時間：11:30～14:30（WSを兼ねた昼食のパワーランチセッション：参加人数確定後、磯辺さん手配）
- ・開催場所：広野町公民館

- ・参加人数：15～20名
- ・プログラム（配布資料参照）

【開会】11:30-11:35	松岡
【報告①】11:35-11:40	趣旨説明：大手
【報告②】11:40-12:00	広野町農家：横田
【報告③】12:0-12:20	福島相双復興官民合同チーム・営農再開グループ：高津参事
【報告④】12:20-12:40	京都大学：石川
【コメント①】12:40-12:50	JA 福島さくら（予）（磯辺さん調整）
【コメント②】12:50-13:00	県農業普及所（富岡）（磯辺さん調整）
【休憩】13:00-13:10	
【パネルディスカッション・総合討論】	コーディネーター：大手
13:10-14:25	
【閉会】14:25-14:30	

- ・広野町の農業は米に特化している。農業経営の安定化を目指す中で、コメだけでなく他の作物でも収納利益が上がる仕組みづくりの指導をしてきているが、実際には、後継ぎ問題・人手不足から、投設備投資等から米に特価し、大規模でやっている。このような状況から、農地を貸すことで農地面積は変わらないが、農家数は減っている。
- ・交流型有機農業をしている農家がいるが、やり方や農作物が何かというのではなく、結局のところ“人”の魅力で交流があるように感じる。一つ一つの事例の積み重ねが大切であり、何か一つの方向性となるのは、難しいのではないかと思う。
- ・RCとしては、この地域が20年後、30年後にどのような地域になっているか、どのような地域にしたいのかということを広域で考え、その提案づくりのお手伝いをしたい。この前提で、今後、この地域の土地利用がどうなっていくのかを考えると、山林はおそらくそのままであろう。そうすると、その次は農地利用のあり方が重要であり、その中でも水田がどうなっていくのが重要となる。広野町の横田さんは家族経営としては耕作農地25haが限界で、法人化はリスクが多くなるため、このままでいくつもりであろう。RCとしては、横田さんのような方が継続していける仕組みを考えることも必要だろう。

（2）第10回運営会議について

テーマ2ワークショップの終了後、継続して運営会議を行い、テーマ3・テーマ2のワークショップ内容の整理と、その次に行われるテーマ1・テーマ4ワークショップの具体的な議論の方向性を議論する。また、テーマ別ワークショップを総合的に考慮し、1/27第3回ふくしま学（楽）会の具体的なプログラムなども議論する。

3.（テーマ1）と（テーマ4）のワークショップ開催について（12月中）

（テーマ1）まちづくりと住民参加：小松和真

- ・テーマ1が具体的に何をしていくのか、前回までははっきりしていなかった。今回もまだ具体性が足りないところでアイディアの段階ではあるが、新潟の「大地の芸術祭」をヒントに「アートによるまちづくり」を考えていきたい。いずれは、双葉8町村、浜通り地域に広がればと思うが、案としては、まずは広野の文化財の修復から考えたい。広野町の田植えから稲刈りまでを表した彫刻があるが、風雨に晒され、色が飛んでおり、地域では囲いをつけ保護をしているものがある。最初の試みとして、まずはそれを現代アートで蘇らせることを考えた。
- ・アートは産業を興すというのではなく、1つの方法として、アートで地域づくりをする、アートを町を興すという方法論と捉えるのではないかと思う。アーティストの目を通して、まちの見直しもでき、地域の資源の再発見にも繋がる。どの規模ですか？大規模なのか？という問題もあるだろう。最終的には双葉あるいは浜通り地域とするとしても、まずは足元として、広野として考えていかなければならないため、今持っているものの再評価から始めようと考えている。

- ・アートの表現は、時に、表現次第で炎上するようないところもあるため、昨今、この炎上を避け、口にすることが難しくなっている。しかし、原子力災害とアートからの取り組みは、大いに共感するところが多いと感じている。アートでしかできないこともあり、強烈なメッセージも表現できる。11/25 いわき市で炭鉱の歴史から限界集落にスポットを当てたイベントがあり、これがヒントになる可能性もある。
- ・外部の人だけでは取り組めず、住民参加が前提にある。他の地域との差別化を考えるのであれば、1F がメインとなり、アーカイブと関連・結びつきを持たせることにもなる。このようなことを実施することは、まさに、まちづくりの取組みとなる。RC としては、広域でのまちづくりに繋がればと考えているため、それも含めた WS を開催してみれば良いのではないかと思う。修復・映像・アーティスト等、知恵をかせてくれる方をお招きしたい。できるだけ、継続的に参加してくれる方に依頼すればいいだろう。
- ・11 月初旬に具体的な案を作成する。

(テーマ 4) 1F の事故処理と汚染水問題: 菅波香織

- ・前回の学（楽）会と RC の取組みを考えると、「事故処理について広い国民的議論」と「浜通り地域がどのような地域でありたいかというビジョン」という 2 つの必要性が挙げられる。ビジョンを語り合う取組みから始めたいと考えている。
- ・将来ビジョンを描くにしても拠って立つ情報がない。処理水の公聴会がかなり業界・市民運動団体がしめていた。しかし、公聴会での意見はそれが住民の総意ではないのは明らかであり、語る場・考える場とそれをどのようにしけるのかを考える必要がある。自分たちで決める市民社会になってほしいと思うが、ビジョンだけ取り上げると少し既視感があり、ビジョンと併せて廃炉も含めなければならない。
- ・いろいろな場で色々な声をだせばいいが、RC として、どのような声を出すのかを考える必要がある。30 年後、50 年後、この地域、日本がどうなっているのかを考えていけば、コンセンサス会議・住民参加型討論など、理想は住民が決めていくことである。しかし、そのための材料を科学者が出すというような community involvement のいろいろなアプローチ手法を検討していかなければならない。
- ・コンセンサス会議は、イギリスのセラフィールドではうまくいったといわれるが、町と州（カンブリア州）では、若干、見解が違う。それは六ヶ所村と青森県や、フランスの県議会議員（地下研究所は許可するが、地層処分は話が違う）の見解が違うのと類似している。今の議論の一つの流れが、現実的には現世代が決めることであるが、将来世代との公平性から、今の世代が何を決めて何を決めないかを考える必要がある。従来は、将来世代に負担をかけないということであったが、そこに、今決めてしまうと将来世代の選択権を奪ってしまうという議論もでてきた。海洋放出においても 1F の処理を進めるために海洋放出が必要というが、いま放出することで将来世代へ影響し、将来世代の選択権を奪うことにもなる可能性がある。世代間公平性ということから、どちらが公平なのかという倫理的な課題になっている気がする。持続可能性というのは、現世代と将来世代との配分の公平性の議論である。
- ・地域設定、世代間の問題という空間と時間の問題は必ずでてくる。今後は、日本でも倫理学者の積極的な介入が必要なのではないかと思う。市民も話を聞けば、リテラシー向上に繋がり、それぞれのアクターが主体性を発揮するというのができれば、今 NIMBY であっても将来は引き受けられるということにもつながる可能性もある。世界でのアプローチの事例を紹介していくためには、遠回りかもしれないが、WS を開催しながら段階的に熟議していくことは一案である。
- ・12 月あるいは 1 月でテーマ 4WS 実施を調整する（その後、12/9（日）午後を開催する方向で進んでいる）。

4. 11/22(木)早稲田大学 戦略的環境研究

「エネルギーと原子力を考える:レジリエンスとサステナビリティ」公開ワークショップについて

配布資料「学部演習のガイダンス」参照。

- ・11/22（木）に予定している、演習最終日の学部生が発表する機会を公開ワークショップとして、RC

のメンバーが参加する。RC メンバーと学生との双方向コミュニケーションを図り、1/27 第3 回ふくしま学（楽）会への示唆も期待できる。

5. デロイトトーマツの学生研修プログラムについて

デロイトトーマツが現在考えている案は、早稲田大学生が早稲田での座学後、広野町にてふたば未来学園の高校生との交流から未来図を作成することである。しかし、南郷先生からは、これまでの類似のイベント経験から、このような短期間のプログラムはあまり適切ではないという指摘があり、今後プログラムの再検討が必要である。

6. 今後のリサーチセンター事業の進め方について

- ・リサーチセンター招聘研究員の拡大
－小山田大和（（一社）エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議・専務理事）
（10/3 より招聘研究員）
－阿部加奈子（広野町復興企画課・主任主査）（予）：松岡先生と面談を設定することとする。
－西崎芽衣（一般社団法人ならはみらい・事務局員）（予）：理事長からの返答待ちの状況である。
－富岡町：推薦者を検討する。
- ・リサーチセンター連携地域の拡大
早急に広野町との協定を結び、その後、檜葉町との協定締結をし、富岡町に広げる方向性とする。
- ・ふたば未来学園高校生の早稲田大学見学
南郷先生に依頼をし、日程を検討する。

7. （一財）福島イノベーション・コースト構想推進機構の現地活動確認について

福島県、経済産業省、文部科学省からの現地活動視察の主旨、日程などについては、別途、松島氏より、事務局までに連絡を頂く。

8. 今後のスケジュール

2018 年

11/2（金） 13:00~16:00	（テーマ3）ワークショップ（専門家・他団体や福島復興学WS 採択大学等との連携）
11/16（金） 11:30~14:30 15:00~18:00	（テーマ2）ワークショップ（専門家・他団体や福島復興学WS 採択大学等との連携） 第10 回運営会議
11/22（木） 13:00~16:15	戦略的環境研究「エネルギーと原子力を考える：レジリエンスとサステナビリティ」公開ワークショップ@早稲田大学 22 号館 207 教室
12/14（金）15:00~18:00	第11 回運営会議
12 月あるいは1 月	（テーマ4）ワークショップ予定（12/9（日）午後で調整） （テーマ1）ワークショップ予定

2019 年

1/18（金）	第12 回運営会議
1/27（日）	第3 回ふくしま学（楽）会

※デロイトトーマツの学生向け研修プログラムは2 月実施予定で調整中

以上